恋愛日記

時雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛日記

【Ｎコード】
Ｎ１５３３Ｄ

【作者名】
時雪崩

【あらすじ】
今日僕は彼女と別れた。感動、別れ、ドキドキの話です※これは実話もちょっと混ざっています（名前などは変えています）

第1話　彼女（前書き）

これは実話も交えた話です
楽しんでもらえたら嬉しいです

第1話　彼女

僕(サトル)は今日、彼女(ミキ)と別れた。

中学校生活としては最後の付き合いだっただろう。

別れるときはものすごく悲しかった。

心の奥が凍るように・・・・

僕と彼女が付き合ったのは6ヶ月前のことだ。

告白したのは僕のほうからだった。

相手が感動するような言葉ではなかったが素直に

「僕と付き合ってください」とストレートに言った。

彼女はメールで良いよといってくれた。

僕は本当に嬉しかった・・・

その日からもう6ヶ月も過ぎたのだ・・・

―6ヶ月前―

僕はいつものように学校生活を普通に送っていた。

1日1日が毎日過ぎていき、友達と話し、遊び、勉強をしていつもと変わらない中学校生活。

でもある日持病の腰がものすごく痛い日だった。

廊下を歩いて教室に行く途中一人の女の子が僕の前に来た。

それは彼女の友達(ケイコ)だった。
ケイコからいきなりゆわれた。
「あのねサトル君、彼女ほしくない？」
僕は驚いていた。
僕はバドミントン部で部活一筋だったので彼女とかあまりほしいとは思えなかった。
「何で？いきなりどうしたん」
僕は聞き返した。
「いやこれはゆったらいけんってゆわれたんだけど・・・」
「ここまでいって、もったいぶるなよ」
そうゆうとケイコの重い口からこうゆわれた。
「あのねミキがサトルの事好きらしんよ」
僕はさらに驚いた。
ミキとは小学校からずっと一緒で、よく話したかとゆうとあまり話した記憶はないが性格もよく美人で一緒にいると、引き付けられそうになる女の子だった。
「まじ？」
「うん本当だよ」

心臓が止まるくらい嬉しかったのに素直に喜べていなかった。
それは昔これと似たことがあっったから・・・

バドミントンの県大会のとき他校の女子から告白されたことがあった。
とてもかわいい子で僕はすぐにＯＫを出した。
でもそれはゲームの罰ゲームだったらしい。
それ以来あまり女子とはしゃべらなくなり、好きという気持ちはなくなっていた。

その日からもう1年たっ。

今では女子とはしゃべるようになったが、好きになるということも忘れていた。
今回もまたいたずらかなんかだろうと思っていた。
ケイコに聞いてみると嘘ではないといわれてしまった。

話の途中学校のチャイムがなりだしてしまった。

「この話はまた後で話すからさ、後このことは絶対ゆったらいけないからね」
ケイコはそうゆって教室に戻っていってしまった。

僕も小走りで教室に帰って行った。

授業は英語だった。
あまり得意ではない教科で一生懸命聞こうと思っていた。
でも僕はミキのことが頭に住み着いて離れなかった。
授業もまったく聞かないでずっとミキのことを考えていた。

学校のチャイムが響き渡る。
「はい、これで終わりまーす」
授業があっという間に終る。
僕は急いでケイコの所に行く途中
「サトル君」
ちょっと怖い感じの声だった。
その声のほうを見ると、英語の先生が立っていた。
何かいやな感じと体が感づいていた。
どんどん先生と僕との距離がちぢまる。
「サトル君ちょっと職員室まで行こうか」
僕はすぐにこれは怒られるとわかった。
僕はしょうがなく職員室まで行く。
そして、先生の机の横に正座させられる。
「サトル君何故、今ここにいるかわかるかしら?」
「えーっと授業をまじめに聞いてなかったからですか?」
「わかってるじゃない、じゃなんできいてなかったの?」
先生は教科書を手に取ると僕の頭を叩いた。
僕は思わず「痛ッ」と言う。
それから休憩時間の間、説教された。

説教が終わると急いで教室に帰ったがずぐチャイムが鳴ってしまった。

僕はしょうがなく席に着く。

６時間目が終わると掃除、掃除時間は話せる状況じゃなかった。

でも掃除もぶじ終わりＨＲも終わった。

今日１日の学校生活がすべて終わったのだ。

僕は急いで教室を出るとケイコが立っていた。

僕とケイコは外にでてさっきの事を聞いた。

話を聞いていくうちに僕はどんどんミキのことで頭がいっぱいになってしまう。

そして思わずこうゆってしまった。

「俺、今日告白する」

自分でもなに言ってるのかわからなかった。

でも今すぐにこの気持ちを伝えたいと思ってしまったからだろう。

僕はたまらずケイコに頼んでミキを呼んでもらうように頼んだ。

その日は木曜日だったので部活は朝練だけだったので今日が告白するゆういつのチャンスだった。

僕は帰り道の川沿いで待っていると、ミキとケイコが歩いてきた。

でも僕は頭が真っ白だったのだ。

さっきまでは告白の言葉まで考えていたのに・・・

そして、ミキが僕の前に来くと、いきなりこうゆってしまった。

「僕と付き合ってください」

ちょっと間が開いて、ミキは右手で口を押さえると

「それ本当？」

ミキはケイコから何も聞いていなかったみたいだった。

「あぁ本当、俺と付き合うのだめか？」

ミキはケイコと小さい声でしゃべり始めた。
そしてミキは走って帰ってしまった。

「えっ？だめだったのか」

思わず声を出してしまった。
するとケイコが

「違うよ、はいこれ私のアド」

ケイコの手からパソコンで作ったような名刺をわたされた。

「これに今日メール送って、私がその後ミキにサトル君のアド送るからさ」

「ちょっとまってよ、さっきの話し教えてくれよ」

ケイコの口からこうゆわれる。

「ミキちょっと考えさしてって、今日中には返事出すらしいけど・・・」

僕はちょっと緊張の糸が解けた。
僕はわかったといってその場を後にした。

第1話　彼女（後書き）

この話は書くときは結構つらかったです
次も頑張って書いていきたいです

第2話　返事（前書き）

僕とミキはわかれた
話はさかのぼり6ヶ月前に戻る
ミキに告白をして家に帰った僕さてどうなる？

第2話　返事

僕は期待を胸にして家に帰った。
僕は急いでパソコンの前に座る。
そしてパソコンのメールボックス開いた。
すぐに更新ボタンを押すがメールは来てなかった。

僕は着替える途中ポケットに固い紙が入っているのに気がついた。
すぐさま出してみるとそれはケイコからもらった名刺だった。
僕はすっかり名刺のことを忘れていたが、ケイコの言っていたことを思い出した。
すぐにまたパソコンのとこに向かう僕。
名刺に書かれているメアドを入力して、メールを送った。
少し時間がたつとケイコからメールが来た。
僕もすぐメールを送った。

そしてメールの回数を増やしていくうちにミキからメールが来た。
僕は深呼吸をしてクリックした。
そこにはこう書かれていた。
「メール遅くなってごめんね
さっきのことやけど・・・良いよ
私もねサトル君のことすきやったんよ
でも勇気がなくてさ・・・
まぁこれからよろしく！！！」
僕は、そのメールを読んでいくうちに、体の中から未知知れぬオーラが出て来るような感じがした。
僕も急いでメールの返事を出した。
「よかった。

だめってゆわれるかもって心配やった
こちらこそよろしく！！！」
と送った。
その日はずっとメールをした。
そして夜3時眠りにいた。

―朝―

朝僕は起きると昨日の夜更かしのせいであまた痛く寝不足だった。
でも昨日のことで学校に行くのがとても楽しみだった。
僕は急いで用意をして学校に行った。

学校に着くと下駄箱のとこでミキが友達と話していた。
僕は話しかけようとして近づこうとした。
でも昨日のメールのことが頭をよぎった。
（確かまだばらしたらいけんって言ってたよな・・・）
僕はミキがまだ恥ずかしいからゆわないでくれとメールで言っていたことを思い出した。
その場から立ち去り教室へ向かった。

いつもどおりの中学校生活だったが嬉しい気分でいつもと違う気がした。
授業も楽しく、給食はおいしく、何もかもが楽しかった。
ケイコには付き合ったことを教えた。
ケイコはよかったねとゆってくれた。

―放課後―

僕はミキとのメールで帰る場所をきめていた。
そうしないとなかなか一緒に帰れないからだ。

その場所は僕が告白をした場所だ
僕は自転車でその場所に行くとミキがちょうどその場所へ向かっている途中だった。

「おーい、ミキ！！！」

ミキが振り向くと

「あっ！！サトル君」

ちょっと照れてしまう僕。
僕とミキは一緒に話ながら帰った。
高校のこと、学校のこと、趣味のこと色々話しながら帰った。

その日々が毎日繰り返された。

第2話　返事（後書き）

この話を書くたびに昔の記憶が読みかえってきてなんだか悲しいです
でも頑張って書きたいと思います
※いいところ、悪い所がありましたら教えていただけると嬉しいです。

第3話　6月～体育会～（前書き）

付き合って1ヶ月がすぎた
そして6月が来た
その6月は・・・

第3話　6月～体育会～

付き合って1ヶ月が過ぎた。

―6月―

この月は体育祭がある月だ。
僕は白ブロック、ミキは黄ブロックだった。
ミキは応援団に入った。
僕はブロック長と応援団をすることになった。
毎日毎日暑く、水を飲めばすぐ汗が出てくるような感じだ。
体育祭の練習がある3週間くらいはミキと一緒には帰れなかった。
ちょっと寂しかったがメールなどで話せたからよかった。

―体育祭1週間前―

僕はブロックのために色々頑張っていた。
中学校最後の体育祭だったのでものすごく気合が入っていた。
でもそれが裏目に出てしまった。
組体操のとき頑張りすぎて僕は左手首腱鞘炎（けんしょうえん）、右手首打撲になってしまった。
理由はピラミッドが崩れ、その巻きぞいになってしまった。
医者は体育祭当日までには直るといわれたが痛みは残っての体育祭だった。
痛みには昔から慣れていたが、ミキのほうはものすごく心配していた。
メールの最初の文は絶対に『大丈夫？』だった。
僕は『大丈夫だよ』と送り返した。

―体育祭当日―

いよいよ待ちに待った体育祭だった。
ミキとは彼女の付き合いだが、この日だけは敵同士だ。
3年最初の競技はリレーだった。
僕は走るのはスキだったのでよかったが、ミキはあまり運動は良いとはいえなかった。
僕は第一走者、ミキは第六走者だった。
僕は2位でバトンを渡した。
ミキも抜かされることもなく無事この競技は終わった。
次の競技は百足競争。
この競技は特に何もなかった。
そして、ついに僕の組体操の番が来た。
両手首の怪我を負ったままの出番だった・・・
組体操は自分でも悲しいことに、ピラミッドが崩れ僕の両手首は酷い腱鞘炎になってしまった。
組体操はそれだけで終わった。
ミキは心配そうな顔で見ていたが、僕は「大丈夫、大丈夫」といって次にミキが出るダンスを見るために席に戻った。
ダンスでは自分でこんなことというのは変だがダンスをしているミキはとても美しいダンスだった。

ダンスが終わると昼ごはんだ。

でもその後は部活動行進と応援合戦だった。
僕は部活動委員長で部活動行進の先頭出歩く人だったのでものすごく緊張していた。
応援合戦のほうはそう緊張はしてなかった。
でも無事部活動行進は終わった。
ほっとする間もなく、すぐに応援団の服に替えた。

なぜかとゆうと、次は一番楽しみだった、ミキの演舞からだ。
すぐ着替え、ミキの演技をずっと眺めている僕。
思わずこんな言葉を出してしまった。

「かわいいな～」

「だれだ、かわいい奴って？・・・」

すると、僕の後ろにはバド部の仲間のタカシがいた。
ちょっとからかうような感じだった。

「うわぁータカシ何でここに！！！」

「何でって、だた黄ブロックの演舞が気になったから見に来たら、
お前が『かわいいな～』とか言ってたんだよ」

タカシが話しているとき、黄ブロックの演舞が終わってしまった。

「おっ、おわっちゃったな」

「うっせぇ。行くぞ次俺たちだろ」

「なに怒ってんだよ」

「うっせぇ」

僕とタカシは入場門へ向かう。
僕はばれてしまったのじゃないかと心配だった。
でもそのことは今は忘れることにした。
僕の所の演舞は2位だった。

ミキの所は3位だった。
応援合戦が終わると僕とミキの番は何もなかった。
雲が流れるように時間も流れていった。
無事体育会は終わった。
僕は一つ大きな行事が終わったことにほっとしている。
「明日は休みか～」
隣にいたタカシにゆった。
「そうだな、お前なんか用事あるのか？」
「いやねぇけど・・・」
「彼女もいねーのかよ」
タカシは笑い始めた。
「お前さっき『かわいいな～』とかいってたやつ誘って遊びに行ってこいよ」

タケシはまだ笑っている。
でも確かにデートも良いよなと思った。
（今日メールで聞いてみよ・・・）

「うるせーよ」

僕とタカシは話しながら帰っていった。

第3話　6月～体育会～（後書き）

いよいよ第3作目です
まだmだ頑張っていきたいと思っています！！！

第４話　６月～体育会～夜（前書き）

体育会が終わりタカシと帰っている途中思わぬこと聞いた僕。
さてミキとのデートは・・・・

第４話　６月～体育会～夜

―帰り道―

体育会は終わった。
帰っている途中タケシから思わぬことを聞いた。

「お前、今日の打ち上げ行くのか？」

「えっ！？今日打ち上げ！？」

「クラスで言ってたろ。確か食べ放題に行くって言ってたぞ」

「そうなんだ、お金って何円いるんだよ？」

「確か飲み放題のほうはいらないって言ってたから、２０００円くらいだろ・・・」

僕の財布の中には４０００円しかなかった。
そのうちの２０００円を使ってしまうとミキとのデートでは苦しくなってしまう。

「行かないってゆうのはだめか？」

「別良いだろうけど、お前ブロック長だったから行かないと・・・楽しみだな」

タカシはのん気に笑っていた。
僕はあまりの悲しさにため息をついた。

「いきなり暗くなるなよ。楽しくいこうぜ！！！」
僕は打ち上げに参加することにした。
家に帰るとすぐに集合場所の駅に行った。
そこには友達が集まっていた。
そしてみんなで夜中まで遊んだ。
１１時くらいに家に帰りついた。

家に帰ると親に怒られ、風呂に入り、パソコンの前に座った。
僕は両手首にシップと包帯を巻いている。
いつもどおりメールボックスを開くと友達から色々メールが来ていた。

「楽しかったね今日は・・・」

「体育会たのしかったね」

　など色々来ていた。

でも一番の楽しみはミキのメールだった。
ミキからは2通来ていた。
1通目にはこうか書かれていた。

「今日はお互い頑張ろうね！！！
まぁ勝つのは黄ブロックだよ（笑）
それじゃ学校でね！！！」

たぶんこれは体育会の朝に送って来たのだと思う。

２通目は体育会が終わって送ってきたものだと思う。

「今日はお疲れ様
お互い優勝はできんかったね
でもいい思い出になったね
応援団もかっこよかったよ
明日は休みだね」

と書かれていた。
僕はすぐに返事を出した。

「今日は疲れたね
お前もがんばっとたね
まぁ抜かされんで良かったやん
明日、暇？
暇やったら遊びに行かん？」

と送った。
そして１１時４０分くらいに返事が返ってきた。

「明日・・・・ごめん遊ぶ約束しちゃった
遊びに行く日また違う日に行かん？
ごめんね」

確かに僕が先にゆっとけば遊べたと思う。
ま、いっかとおもって返事を出した。
そして眠りに着いた。

―次の日―

僕は１２時くらいに起きた。
何もすることもなかったので自転車に乗って本屋に行った。
そして時間をつぶした。

第４話　６月～体育会～夜（後書き）

第３話でタカシがタケシになっているとこがありました。すみません
さていよいよ４話目です
彼女と別れて悲しかったものの、だいぶ元気になってきました。
まだまだ頑張っていきたいと思います

第5話　夏休み突入（前書き）

体育会も終わり、夏休みになった。
デートに誘った僕だったが、時間が合わずいけなかった。
でもこの夏休みは・・・・

第5話　夏休み突入

体育会が終わっていつもの中学校生活が始まった。
学校が懐かしくなるような感じだ。
夏休みまで約1ヶ月ってとこだった。
ミキと付き合って2ヶ月位がたった。
毎日一緒に帰り、色々なことを話した。

―夏休み前日―

やっと夏休みに入る。
僕はわくわくしながら学校に向かった。
校長の長ーい話も終わり、生徒会の話も終わり、教室に帰ると成績表をもらった。
あまり良い評価ではなかった。
ちょっと残念だったが、気にしないことにした。

そしていよいよ待ちに待った夏休みになった。

夏休み初日の天気は快晴・・・

僕は夏休みに目標があった。
それはバドミントンの県大会出場とミキとのデートだった。
夏といえば・・・花火
そう、この花火を見に行こうと思っていた。
僕は帰っている途中にミキの花火デートのことを話した。
ミキは高校進学のために塾に行くことになっていた。
行けるかはまだわからないといっていたが、行けるように頑張るといってくれた。

僕はいちをパソコンで日程を調べミキに教えた。
８月１４日に行く予定を立てた。
ちょうどこの日は僕の誕生日だ。
僕はいけることを楽しみに待っていた・・・

バドミントンのことも頑張ろうと思っていた。

―８月１４日前日―

僕は明日のことがいっぱいでなかなか寝れない。
なんたって初めてのデートだったので緊張している。
明日は何を食べよう。
そんなことまで考えた。
考えているうちに僕は寝ていた・・・・

第5話　夏休み突入（後書き）

もう夏休みに入りました。
皆さんのおかげで評価もよくなってきました。
応援よろしくお願いします！！！

第６話　暗闇空に咲く花火（前書き）

誕生日を控えた僕。
デートに誘い、花火大会に行くことを約束をした。
そしてついに、８月１４日になった・・・

第6話　暗闇空に咲く花火

―8月14日―

ついにこの日がやってきた・・・
どれだけこの日が待ち遠しかったことか。

僕は朝、目を覚まし、1階へと降りた。
1階には誰もいない。
母と父は会社、姉貴は・・・どこにいったのだろう？
まぁそんなことはどうでもいい。
僕は、パンをトースターにいれて、牛乳を出した。
パンが焼けるまでに、メールのチェックをした。
メールは1通も来てなかった。

「チン」

パンが焼けた。
僕は牛乳と一緒に食べる。
食べ終わった後、何をしようか考えた。
11時から塾、終わって帰ってくるのが3時、それから駅に3時30分に待ち合わせて、デート・・・
今は10時、あと1時間本当に何をしよう・・・・
何もすることが無かったので、今日行くとこを調べてみた。
そんなこんなするうちに11時前になった。
僕は、制服に着替え、自転車に乗り、塾へと出発した。
塾は、いたってどこにでもある塾だ。

3時になった。

塾でチャイムが鳴った。
僕は急いで自分の家に帰った。
着替えて、財布を持ち、髪を整え、時計をして駅に出発した。
自転車に乗って駅まで行こうとしたが、歩いていくことにした。
そのほうが帰りに迎えに来てくれるからだ。
３時２３分に駅に着いた。
駅にはもうミキが来ていた。
普通は僕が早く来ないといけないはずなのに・・・

「よっ、ミキ」

ミキはこっちに振り返ると

「あっ、やっと来た」

怒ってはいなかった。

「それにしても早いな」

「２０分くらいについたんよ」

「まぁ切符買おっか」

「そうだね」

僕とミキは切符を買った。
そして、３時４２分の電車に乗った。

電車の中は祭りの事あって満員、迷子になるかと思うくらいの人

だかり。
僕はミキの手を握った。
よーく考えてみると、手を握ったのは初めてだ。
僕はそっと、ミキの顔を見た。
顔は真っ赤だ。
なんだかんだで目的地に着いた。
ホームを降りると深呼吸をした。
駅前から花火祭りで賑わっていた。

「じゃまずどこにいこっか？」

「んー屋台に行きたい」

「わかった、屋台は確か・・・」

パソコンの記憶を蘇らす。
僕はミキを誘導した。
ミキの顔には笑みが絶えなかった。
僕とミキは、祭りを思いっきり楽しんだ。

そしてついに・・・・

『ドーン、バーン、ヒュルルルル、バーン』

暗闇空を花火が咲いた。
僕とミキは花火を見ていた。
普通はここらへんで・・キス！？とかする感じだけど・・・して
よいのらや・・・
僕は考えたが止めてしまった。
何か恐くなってしまったからだ。

僕とミキは空に咲く花火を楽しんだ。
時間は９時４８分くらい
最後に今まで見たこと無い大輪が空に咲いた
「おぉ～」
思わず口からこぼれてしまった
ミキも
「今のすごかったね！！！」
テンションが高まった。
『これで、この祭りの全部を終えたことを教えます』
「終わっちゃたね」
「うん、おわってしまったね」
僕とミキは歩いて、駅に向かおうとした。
でもすごい人だかりでまともに歩けなかった。
「ねぇミキ、ちょっとどこか通って行かん？」
「いいよ、この人だかりだものしょうがないよ」
僕とミキは、近くのデパートにはいった。

「何か見るか？」

「ちょっとトイレに行きたい」

「じゃトイレにいっトイレ」

・・・・白けてしまった。

僕はトイレの近くでミキを待った。

そのとき

僕の肩を誰かが叩いた。

振り返ると、なんとそこには幼なじみの渚（なぎさ）がいた。

「なんで、お前がここにいるんだよ！！！」

「なんでって、遊びに来たにきまっとるからだろうが。相変わらず馬鹿やな」

渚は馬鹿にするような笑い方をしている。

渚は僕の１つ上の先輩で、家が隣の隣で古くからのダチだ。

おまけに言えば、渚の頭脳は学年１位を何回も取る化け物だ。

「お前なんで、ここにいるんだ？」

渚が聞いてきた。

「なんでって、トイレに来たからにきまっとるからだよ。相変わらず馬鹿ですね」

さっきの恨みをこめて言い放った。

「ふーん、っまいいけど、そんなことは」

「お前今日1人で来たのか？」

僕は先輩の中で、渚だけにはお前と言いきれる。

「うんや、友達3人ほどと来ているんだけど、トイレ待ちで、今まっとるわけや」

「へぇ～」

「ところでお前、誰まっとるんや？」

「誰って・・・さぁ？」

「また意味のわからんことを」

渚とあって15分ほどたつと、トイレからミキが出てきた。

「お待たせ、サトル」

付き合って約3ヶ月お互いのことを下の名前て呼ぶようになっていた。

「来た来た、じゃどこか行こうぜ」

「そうだね、どこにいこ・・・」

ミキは渚の目線に顔を向けてしまった。

「あー！！！」

ミキは渚のほうへ向かっていった。
そう、ミキの昔僕の家の近所に住んでいたのだ。
だから、渚の顔は嫌って程見ている。
でも小学2・3年のときにミキは校区外に引っ越した。
小学校は変わらなかった。
よーく考えてみると僕とミキは幼なじみなのかな？
なんて事を考えてしまった。

「何で、渚がいるの？」

ミキも渚のことは呼び捨てにしている。

「なんでって、ダチ待ち」

ミキと渚が話している途中にトイレから渚の友達が出てきた。

「わりぃミキ、俺ダチが来たからいくわ、じゃぁなラブラブカップル」

僕は、ちょっと照れてしまった。
ミキのほうを見るとミキは何か考えていた。

「サトル、ちょっとヤバいかもしれないよ。渚の弟って中1じゃなかったけ？」

「そうだけど、何かあったか？」

「いや～渚が弟にこのこと話して、中学校で言いふらさないかなって思って・・・」

「考えすぎだよ。渚はたぶん口堅いと思うし・・・気にすんなよ」

「そっそうだよね。じゃ次どこいこっか？」

僕とミキは１０時３０分くらいに自分たちの住んでいる町に着いた。

帰り際に、ミキから誕生日プレゼントをもらった。

小さいかわいらしい箱をもらった。

中身は教えてくれなかったが、「左足につけてね」といって帰って行った。

そして夏休みが過ぎた・・・・

次の月がとても嫌な思い出が詰まっている月とは知らずに・・・・

第６話　暗闇空に咲く花火（後書き）

遅れてすみません。
２００７年も過ぎてしまいました。
改めて、あけましておめでとうございます。
どうぞ、今年もよろしくお願いします。

さて、この話では夏休みが過ぎてしまいました。
次は、あまり嫌な思い出が詰まってしまった月です。
次の話の連載日時はわかりませんが、早めにしたいと思うので、どうぞお楽しみに・・・

第7話　悪の9月（前書き）

夏休みに念願のデートに行った僕。
そして楽しかった夏休みは終わってしまった。
そして、誰もが思わなかった最悪の9月がやってきた。

第7話　悪の9月

―9月―

まだ最悪な月とは知らない僕は学校に行った。
学校では、みんな顔が真っ黒に焼けていた。
夏休みの話、部活の話、勉強の話など色々話ていた。
ちなみに、僕のとこのバド部は県大会まで行ったが負けてしまった。
もう部活は引退した。
主将の座を後輩に譲った。
そして、勉強に追われる毎日になるのだ。

僕は、体育館に行き、校長の有難い話?を聞いていた。
校歌を歌い、部活動生の表彰をして、始業式は終わった。
学校はすぐに終わり、ミキを待つためにいつもの場所に行った。
ミキが来るといつも通りに帰った。
花火のこと、高校のことなどを話ながら帰った。

月日は流れ、9月中旬

いつも通り学校に行ったが、僕はちょっと不機嫌だった。
毎日来るメールが来なかったからだ。
なぜだろうと思いながら、僕は学校へ向かった。
学校に着くと、ミキの教室に行った。
だがミキはまだ来てなかった。
チャイムが鳴ってもこなかった。
僕は昨日メールが出来なかったのは、風邪かなんかで出来なかったのだろうと思った。

だから今日は休んだんだ、と思った。
そう、思いたかった・・・

２時間目が終わり、１０分休みを友達と話しているとき、僕の隣にケイコが来た。そして、僕に手紙を差し出した。

「これ、読んどって、あとショックをうけんようにね・・・・」

ケイコはなぜか暗い顔をしていた。
さすがに今見るのは、友達がからかってくるので、授業中に読もうと思った。ちょうど次の授業は数学、計算を解いていれば怒られることも無い。

『キーン　コーン　カーン　コーン』

チャイムが鳴ると、席に着き、数学が始まった。
計算をさっさと解くと、僕はポケットに入れた手紙を出して、読んだ。
そこには、ものすごいショックを受ける事が書かれていた。

『昨日の夜にね、ケイコの家、火事になったみたい・・・
全焼ではなかったけど、家の中は黒こげらしんよ
リホームすれば何とか直るらしいけど、かなりショック受けとる見たい
だけ、助けてやって・・・
あと、メールは火事のせいでパソコンが水をがぶって壊れたらしいけ注意してね』
と書かれていた。
僕はあまりにビビッて机から飛び出そうな感じだ。

学校を抜け出したくても、６時間目は大事なテストだ。
僕はどうしたらいいのか分からなくなった。

「おい、棚木(たなぎ)ココの問題を解け」

僕は、黒板の前に行くと、チョークを持ち、問題を解いた。
僕、棚木(たなぎ)　悟(さとる)は今ショックで元気がまったくといっていいほど無かった。
（名前は変えておりますのでこれは、本名ではありません）

「よし、いいぞ机に戻れ」

僕は席に戻った。

２時間目終了のチャイムが鳴ると、僕はケイコのとこに行った。

「なぁケイコ、ミキは大丈夫なのか？」

心配だったことを聞く。

「ミキたちには怪我はは無かったらしいけど、やっぱりショックやったみたいよ」

「そうか、今はどこにいるかわかるか？」

「今は近くのマンションに住んどるらしいけど・・・」

「わかっかサンキュウ」

僕は席に戻った。

そして学校が終わった。

僕は自転車にまたがり、ミキの家のとこまで行った。

ミキの家の回りは焦げてはいなかったが、家の窓からは電気の明かりも無く、黒色が見えている。

ミキの今住んでいると思われるマンションに着いた。

チャイムを押したが誰も出てこなかった。

僕はしょうがなく自分の家に帰った。

第7話　悪の9月（後書き）

本文にもありましたが、名前等は変えております。
ついにこの月がやってきました。
まだまだこのほかにも最悪は続きます。
次回をお楽しみに・・・

第8話　悪の9月～ミキを元気つけよう作戦～前編（前書き）

夏休みも終わり、受験勉強にいい秋の9月。
でもその9月は悪の9月になってしまった。
ミキの家が火事になって3日後、学校に来たミキだったが・・・・

第8話　悪の9月～ミキを元気つけよう作戦～前編

僕は、ミキからのプレゼントの事を忘れていた。中身はミサンガだった。僕はもらったミサンガをゆわれたとおりに、左足につけていた。
意味は、『愛』という意味らしい。

ミキの家が火事になって3日後、ミキが学校に来た。
学校のみんなはミキの家が火事になったことは知らない。
知っているのは、ごく1部。
学校で話すと、付き合っていることがばれるので帰りに話すことにした。

―放課後の帰り道―

僕は今一元気のない、ミキと帰っていた。
元気がないのは当たり前だ。そこを元気つけるのが彼氏の仕事。がんばろう。

「なぁ、ミキ、今度またデート行かないか？」

元気のないミキは返事をしなかった。
話題を変える事にした。

「この前さ、俺たちが遊んでいるときによ、2年が来てさ、喧嘩になったんだよ。今思えば何で喧嘩になったろうな？」

やっぱりミキは何も返事をしなかった。
僕は逃げたかった。でもそれは駄目なことだ・・・

僕はどうしたらいいか分からなくなった。
帰り道の坂を上がっているときにいいことを思いついた。
「なぁミキ明後日海に行こうぜ」
「何で・・・・」
やっと返事をしてくれた。
でも、いつものミキとは思えない声だった。
「9月の海ってあまり見たことないだろ。何かきれいな予感がするんだよ。」
「今、そんな気分じゃないんだ・・・・」
話が絡み合わない。
そんなこんなでもうミキのマンションまで来てしまった。
「じゃぁなミキ、明日また会おうな」
「うん・・・」
さっぱりとしない感じだった。
僕は自転車にまたがり、家に帰った。
僕は家に帰りつくとパソコンを開いた。
そして、ケイコにメール送った。
「よし、できた。」

僕はパソコンのワードである文章を作った。
その文章をケイコにも送った。
ケイコからのメールもいい反応が返ってきた。
僕はその文章を明日ミキにあげるつもりだ。

第8話　悪の9月～ミキを元気つけよう作戦～前編（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
今回は前編・後編でいきたいと思います。
今頑張って5日に1話くらいのペースで頑張っています。
応援よろしくお願いします！！！！

第9話　悪の9月～ミキを元気つけよう作戦～後編（前書き）

元気のないミキに、元気づけさせようとした。
そのために手紙を書いたのだが・・・

第9話　悪の9月～ミキを元気つけよう作戦～後編

―次の朝―

僕は、起きた。

髪の毛がピンピン跳ね上がっていた。

「そろそろ、髪の毛切らないとな・・・」

そんなこと思いながら僕は学校へ行く用意をしている。

朝ごはんを食べ終わり、学校へと向かった。

「今日は、英語と体育と数学と国語か・・・っまでも4時間だし楽だな」

そんなことをつぶやきながら学校に行く途中に誰かの声が聞こえた。

僕は振り向くとそこにはタカシが走っていた。

タカシは息を切らしながらこっちに向かってくる。

僕は足を止めた。

「おはよう、タカシ」

「ふぅ、きついぜ最近部活に行ってないからな・・・はぁ」

でも2分ぐらいたつとタカシの息は調った。

「そういえばサトル、聞いたか？」
「何が？」
「今度、専門委員会でなんかするらしいぜ」
「えっこの前ので終わりじゃなかったのか？」
「まぁよくしらねぇが、今日の放課後音楽室に集合らしいぜ！！！」
（嘘だろ・・今日の放課後はミキに手紙を渡すはずだったのに・・・）
「それって今日じゃだめなのか？」
「さぁ、会長に聞いてみな」

僕はとても嫌な予感がした。
僕のとこの会長は、頭脳では学校上位、運動神経抜群、何でも出来る天才といってよいのだが、どこかネジが抜けている奴で、たまに変な活動を考える。
今回は何だろうとか考えたりもする。

そんなこんな話しているうちに学校についてしまった。

僕は上靴に履き替え、教室へと向かった。
鞄を置き、隣の教室に行った。
そう、会長に会いに行くのだ。
会長は学校に来るのが早いので、席に座っていた。

「おーい、会長」

会長は振り返ると、ニコっと笑った。
ちょっと気味が悪い。

「ちょうど良かった。今日音楽室に集合だから・・・」

「そのことなんやけど、明日じゃ駄目？」

即答だった。

「駄目」

「何で？」

「みんな今日じゃないと時間が合わないもん」

「わかった、じゃ今日行くよ」

「わかればよし、じゃまってるね」

僕はしんみりしながら教室に戻っていった。

―放課後―

僕は、音楽室に行った。
そこには、生徒会の男子のみがいた。

「来た来た、じゃはじめよっか」

会長はテレビを出してきた。
そして、ビデオのボタンを押した。
テレビの画面にオタク系のアニメが出てきた。
生徒会全員が言った。

「これ何？」

「これを今度の集会で踊ります」

「・・・・帰ろう」

「そうだな帰ろう」

みんなが同じ事を言った。

「待った！！！」

みんなが止まった。

「これが中学校生活最後の活動なんだよ、だから最後だけ頼む」

みんなと話し合った結果、することになった。

1時間ほどすると集会は終わった。
僕は急いで、いつもミキがいるところに向かった。
ミキは待っていってくれた。

「よっミキ！！！」

僕はまだ元気がないのだろうと思ったので元気よく言った。

「何で今日はそんなにハイテンションなの？」

いつものミキだった。

僕は思わず聞いた。

「いやー、お前が火事のことで元気がなかったからよ、ハイテンションで言ったんだけど、何かあった？」

「うん、家改装する事になったの」

「あーぁそうなのか、良かったなミキ」

「うん」

僕たちはそのまま帰った。

ミキのために書いた手紙は意味がなかった。

でも良かった。元気になってくれたから・・・

今もその手紙は、僕の机の中に眠っている・・・・

第9話　悪の9月～ミキを元気つけよう作戦～後編（後書き）

更新遅れてすみません。
色々テストなどで忙しかったので・・・
まだまだ頑張っていくのでよろしくお願いします！！

第１０話　悪の９月―最終曲―

―朝―

いつもと変わらない、晴れ模様。
ちょっと肌寒い温度です。
９月も残り２日で終わる・・・そう思っていた。
でも、９月最後の日は、最後の悪夢の日だった。

―学校―

僕たちの学校は、昼休みに手作りのバットに、紙を丸めてガムテープを張ったボールで野球をするのがブームだった。
給食を食べ終わると、靴に履き替えて、学校の中庭みたいな所で野球をする。
２・３階で１・２年が僕たちを見ている。
応援しているのかよくわからないが、ものすごい人だかりだった。

そんなある日に、僕達の一つ下の学年の２年が見ていた。
２年はものすごく荒れているので、３年もあまり相手にしなかった。
ピッチャーがボールを投げた。
バッターが打つと２年が見ていたところにボールがいってしまった。
僕はやばいなと思った。
２年はボールを拾うと、こっちに思いっきり投げてきた。
そのボールは誰にも当たらなかった。
でも、当たらなかったのが気にくわなかったのが知らないが、２年が中庭に下りてきた。

「おい、こんなとこで野球やっていいのか、先輩」

ものすごく嫌な言い方だった。
２階で文句を言う後輩

「あんま調子に乗るなよ」

そうゆったのは、タカシだった。
それにつられて、３年も言い返した。
２年もさらに文句を言ってきた。
そして、２年が１階に下りてきて喧嘩になってしまった。
激しい殴り合いだった。
先生が止めに入って、一旦喧嘩は終わった。

でもこれだけでは終わらなかった。

５時間目が終わり、１０分休みになった。

僕は１組にいた。
すると、いきなり大群で２年が入ってきた。
僕はこれはまずいと思った。
タカシが２年の前に行った。

「何かっちゃ、ここは３年の教室やぞ早く自分の部屋に帰れ！！！」

「はぁお前に用があるんだよ。放課後体育館裏に来い！！！」

今時、体育館裏に来いなんてあるんだなと僕は思った。
でもこれは早くとめないと大変なことになると思ったので、タカシを一旦２年から離した。

『キーン　コーン　カーン　コーン』

チャイムが鳴った。
2年は文句を言ってから教室に帰っていった。
でもタカシの怒りは頂点に達していた。

「次来たら絶対に殺す」

そういって教室に帰っていった。
僕も急いで教室に帰っていった。

6時間目も終わり掃除になった。
タカシはまだ怒っていた。

掃除も終わり、ホームルームになった。

ホームルームも終わり、下校。
校門前には僕の予想通り2年がいた。
そこにはタカシもいた。
喧嘩がまた始まっていた。

僕は急いで止めに入った。
タカシと2年をまた離した。
でも喧嘩が止まることはなかった。

県下の中でいきなり、1人の2年が僕を殴ってきた。
僕は意味もわからずに地面に叩きつけられた。
僕も意味もなく殴られたので、ちょっと腹が立って殴り返した。
喧嘩をしていると、先生が来た。

「コラ！！！何しとるんだ、馬鹿者！！！」

喧嘩が止まった。
そして、職員室へ・・・
１時間近く怒られた。

１時間も帰るのが遅くなったので、ミキが待っていてくれているか心配だった。

僕とミキとの待ち合わせ場所は、川の河川敷になっていた。
ミキは待っていてくれていた。

「遅い！どこ、におったん？」

「わりっ、怒られよった」

「なんで？」

僕はミキにさっきのことを全部話した。

ミキはため息をついてこういった。

「もう、高校近いんやけ、喧嘩やめな高校行けんくなるよ」

痛い言葉だった。

「はーい」

といって帰った。
やっぱりミキは助かる

―次の日―

朝、天気は曇り

僕は学校に向かった。
校門にはやっぱり2年がいた。
そして、絡まれる。
まったくめんどくさいものだ。
2年は文句を言っているが、聞こえないふりが一番。
そして逃げる。
教室に向かっていると昨日喧嘩を止めた先生がいた。

「もう喧嘩はするなよ」

がみがみゆわれるかと思ったが言われなかった。
僕はほっとした。

―3時間目―

苦手な英語が終わり、ダラーとしているとまたまた面倒な事に2年が入ってきた。
そして何も言わず、僕の胸ぐらをつかみ、殴られた。
さすがに頭にきて殴ろうとしたが、昨日の言葉がよみがえってしまった。

「もう、高校近いんやけ、喧嘩やめな高校行けんくなるよ・・・」

僕は右手を納めた。
殴れなかった。
廊下にはミキがいた。
左手で口を押さえていた。
２年は殴ると帰っていった。
いらいらはしたが、ぐっと我慢した。

廊下にはミキの姿はもうなかった。

帰り道にもミキはいなかった。

それから9月は過ぎていった。

でも帰り道にはミキの姿はなかった。

ずっとずっとまっていたがこなかった。

その日々が１０日以上過ぎた・・・

第１０話　悪の９月―最終曲―（後書き）

すいません、１ヶ月も更新できませんでした。
ちょっと受験があったもので・・・
まぁ終わったのでどんどん更新して行きたいと思います・

第１１話　分かれの前日（前書き）

いろいろあった９月も過ぎたように思えたが、ミキからの返事が返ってこなくなった。

第１１話　分かれの前日

９月も終わり、いつもと変わらない道。
いつもと変わらない先生、友達。
でも変わるのはミキだけだった。
いつも待ち合わせしていた川の河川敷にもいない
帰り道はもの寂しいものだった。
つい５ヶ月前まではこの風景だったのに・・・
メールを送っても返事はない。
話しかけようにも逃げてしまう。
どうしよう・・・

僕は考えた。

その結果、ケイコに頼むことにした。
ケイコに声をかけてミキのことを話した。
でも何かちょっと切れ気味だった。
そして、相談にも乗ってもらえなかった・・・
どうやらミキと喧嘩をしたみたいだ。
家に帰り、ミキに喧嘩の事を送った。
そうすると、１０日以上ぶりにメールの返事が返ってきた。

「何でその事しっとるん？」

「友達から聞いた」

そして、何故喧嘩をしたのか、何故メールを無視したのかを聞いた。
その理由は喧嘩の原因はよくはわからなかったが、軽い遊びが喧

嘩になったらしい。
仲直りさせようと思ったが駄目だった。
もうひとつのメールを無視した理由は、僕に喧嘩をするなっと言ったのにミキが喧嘩をして、自分を責めていたみたいだ。

「そんなに自分を責めるなよ」

「うーんでも・・・そうやね。今まで自分が情けなかったけど、喧嘩くらいは誰でもするしね。ゴメンネメール無視して。また明日から一緒に帰ろうね」

「うん。明日一緒に帰ろうね」

久しぶりのミキとのメールだった。
嬉しかった。
嬉しい気持ちのまま僕は眠った。

―次の日―

学校では久しぶりにミキと話した。
やっぱりこっちのほうが楽しい。
うんそうだ。
ミキはケイコに喧嘩の事を謝った。
僕はケイコは許すだろうと思った。
だが予想外の展開だった。

「いや、本当に謝りよんやったら土下座してよ。」

僕は一瞬前が見えなくなった。
だがすぐに我に戻った。

「おい、ちょっと待てよ。なんで土下座なんだよ」
ミキはちょっと泣きそうな感じで、怒っていた。
「なんで、誤ったのに土下座とかせないけんの？いい加減にしてよ」
「別にだれも謝ってとか言ってないし」
その時、ミキの左手がケイコのホッペに直撃した。
すかさずケイコがミキの左ホッペにビンタをした。
そしてはじめてみる女性同士の殴り合い・・・
僕はすぐにとめに入ったが、駄目だった。
2人を離そうにも駄目、押さえ込もうにも相手は女性・・・あぁ
どうしたらいいんだろう・・・
「コラー喧嘩をしてるのは誰か！！！」
怒声が響きわたった。
バドの顧問の先生と僕が一番信頼していた学年主任の先生だった。
すぐに2人とも指導室に入れられた。
僕は保健室でまっとくように言われた。
保健室では看護の先生が仕事をしている。
そして、なぜか仕事を手伝わされた。
ガーゼを入れ替えたり、書類をまとめたりしていた。
そこに学年主任の先生が僕を呼びにきた。
どうやら、喧嘩の事を聞きに来たらしい。
僕は全部話した。
学年主任の先生は納得しないまま指導室にもどった。
僕は帰るように言われた。

先に川の河川敷に行く事にした。

太陽も早く沈み、風景は夜になった。
どれくらいの時間がたっかかわからない。
ミキは来なかった。
かえってメールをしたが、帰ってこなかった。

第１１話　分かれの前日（後書き）

すみません
１ヶ月も更新できなくて・・・
えーついに次話が最終話です。
更新はなるべく早くしたいですが、遅れるかもしれません。
楽しみに待っていてください！！！
なお、ご意見・ご感想を書いていただけると嬉しいです

第１２話　最終話～別れと新しい道～（前書き）

ミキからのメールが来なくなった・・・

第１２話　最終話～別れと新しい道～

ミキからメールの返事がこなくなってから5日がたった。
どうなったのかまったく解らない。
どうしよう。
また、喧嘩をしたのだろうか？

―次の日―

学校に行くのは久しぶりのようだった。
靴を靴箱に入れると、ミキのいる1組へ向かった。
1組に入ると、ドア付近にミキの姿があった。
僕とミキの目が合うと、ミキはにこっと笑い。

「おはよう」

予想外だった。
僕の予想ではまた逃げてしまうだろうと思っていたからだ。

「ミキ、何でメールを無視したんだよ」

そう僕が問うと、ミキは簡単に言った。

「ゴメン、するの忘れとった」

僕はムカッとした。
殴りたい気分だったが、怒りを抑え無言で教室に戻った。
教室に戻ったのはいいがどうしよう。
もう、終わりなのかな・・・

机に顔を伏せた。
自分に何度も問いかけた。
だけど答えは全部あやふやだった。
どうしたら良いんだろう・・・
あぁわかんねぇや。

学校が終わった。
僕は別れるのか、別れないのかとても悩んだ。
いつもの川の河川敷に向かった。
ミキはまだいない。
１０分くらいするとミキが来た。

「ごめん待った？」

「さっき着たばかりだよ」

複雑な気持ちのままミキと話した。

「そっか、ってかなんでさっき無言で教室に戻ったん？」

僕は心の中でかなり怒っていた。

「なぁミキひとつ聞いていいか？」

「いいよ」

「ミキはこれからどうしたいか？」

「どうって・・・どうゆう意味？」

「あと3ヶ月したら中学校生活も終わる。ミキは看護系の学校、僕は調理系に行くけど、このままで良いと思うか？」

「いやよくないけど、何でいきなり？」

「別れないか？」

口から『別れないか？』の言葉がこぼれた。

「何で？」

「もうミキは俺を愛してない。俺ももう愛せない。だから・・・」

「もっと納得できるように言ってよ」

「だから、もう嫌なんだよ。お前が」

ミキは泣き出した。

僕もこんな事は言いたくなかった。

でも言わざるをえなかった。

それはもちろんさっきの事もあるが、もうひとつ、ミキは渚に恋をしているからだ

まだそうと決まったわけではないが、ダチの情報によるとこの5日間渚と帰っていたみたいだ。

多分メールを忘れていたのは事実だと思う。

渚とのメールに夢中になりすぎて・・・

多分僕と付き合うより渚のほうが良いんだ。

負けたんだ。

ミキはまだ泣いている。

少したつと涙がおさまってきた。

「ほん・・とうに・・そ・・れで・・いい？」

「あぁ」

「わかっ・・・た、じゃ・・・・・お別れね」

「あぁじゃあな。お幸せに・・・」

ミキに背を向け僕は家へと向かった。
自分の部屋のベットに倒れこむと涙が止まらなかった。
あぁおわったんだな。
いつ立ち直れるのだろう。
はぁ。
でも、いつまでもくやくやは出来ないな・・・
よし頑張っていくか。

そして、僕はまた新しい道を歩み始めた。

第１２話　最終話～別れと新しい道～（後書き）

これまでよんでいただいてありがとうございました。
いろいろおかしい部分などがありましたが、これまでこの作品を書けてとても楽しかったです。
これからも書いていきたいと思いますので応援よろしくおねがします。
本当にありがとうございました！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1533d/

恋愛日記

2010年10月8日15時38分発行